

目 次

まえがき	庵 功雄 i
序章 本書の目的と構成	1
1. 本書の問題意識	1
2. 本書の構成	3
第 1 部 先行研究における形容詞と連用用法	
第 1 章 日本語の形容詞と用法	8
1. はじめに	8
2. 日本語の形容詞の位置づけ	8
3. 形容詞の用法	12
3.1. 形容詞の 3 用法 ... 13	3.2. 形容詞の 3 用法と分布の偏り ... 17
第 2 章 形容詞の分類をめぐって	22
1. はじめに	22
2. 「感情形容詞」と「属性形容詞」	22
2.1. 「感情形容詞」と「属性形容詞」の形態的・構文的特徴をめぐって ... 23	
2.2. 「感情形容詞」と「属性形容詞」を分けるもの ... 31	
2.3. 「中間的な語」について ... 35	

3. その他の分類	46
3.1. 文機能論からの分類 ...	46
3.2. 相対性から見た分類—「絶対的形容詞」と「相対的形容詞」— ...	49
3.3. 対象内容による分類—モノとコト— ...	50
3.4. 時間的限定性による分類—「状態形容詞」と「質形容詞」— ...	53
3.5. 把握のあり方による分類—「直観的把握」と「思念的把握」— ...	55
4. 本書の立場と分析	57
第3章 形容詞の格をめぐって	62
1. はじめに	62
2. 形容詞の格に着目した分類	64
2.1. 形容詞の項（必須成分）を記述した研究 ...	64
2.2. 文機能から形容詞の格を分析した研究 ...	68
3. 形容詞文と主題と述部	74
3.1. 「名詞1ハ名詞2ガ形容詞」文について ...	74
3.2. 「名詞1ハ名詞2ニ形容詞」文について ...	78
4. まとめ	81
第4章 形容詞の連用用法をめぐって	82
1. はじめに	82
2. 先行研究における「修飾語」の扱い	84
3. 連用修飾語の分類	87
3.1. 連用修飾語の2分類 ...	87
3.2. 述語の修飾語の分類 ...	89
4. 本書の立場と分析の観点	98
4.1. 本書で用いる分類の観点 ...	98
4.2. 本書の分類の意義と従来の研究との対応 ...	103
4.3. 本書の立場と分析の観点のまとめ ...	110

第2部 連用用法における形容詞のタイプ

第5章 考察の枠組み	114
1. はじめに	114
2. 「観察可能性」による分類から	115
3. 「説明対象」による分類から—「内面的用法」の下位分類—	116
4. 考察の対象となる形容詞について	122
5. まとめ	124
第6章 外面的用法と形容詞のタイプ	125
1. 問題の整理	125
2. 外面的用法と形容詞のタイプ	127
3. まとめ	129
第7章 内面的用法における形容詞のタイプ (1)	
—形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞ではない場合—	131
1. 問題の整理	131
2. 動作主認識の副詞的成分と形容詞のタイプ	135
2.1. 連用用法に見る3種の形容詞 —動作主認識の副詞的成分としてのふるまいから— ...	135
2.2. 終止用法に見る3種の形容詞 ...	137
2.3. 動作主認識の副詞的成分となり得る形容詞 —「寂しい」タイプと「面白い」タイプの連用用法— ...	145
2.4. 注意すべき形容詞群 ...	149

3. 動作主認識の副詞的成分の文中におけるふるまい	154
3.1. 動作主認識の副詞的成分の統語構造 ...	154
3.2. 動作主認識の副詞的成分と述語動詞の関係性 ...	156
3.3. 動作主認識の副詞的成分の成立要件とは ...	159
4. 動作主認識の副詞的成分の諸問題	160
4.1. 問題の所在 ...	160
4.2. なぜ「映画を怖く見ている」は言えないのか ...	163
4.3. 「おいしく食べてください」はいつ成立するのか ...	164
4.4. なぜ「彼を苦しく見ていた」は言えないのか ...	167
5. まとめ	173

第8章 内面的用法における形容詞のタイプ (2)

—形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞である場合—	176
1. 問題の整理	176
2. 「思う」を述語とする文における形容詞のタイプ	180
2.1. 考察の指針 ...	180
2.2. 「には」を用いたテストと形容詞のタイプ ...	183
2.3. 「思う」を述語とする文における形容詞のタイプ—アンケート結果から— ...	189
2.4. 「思う」を述語とする文における形容詞のタイプのまとめ ...	193
3. その他の認識動詞における形容詞連用形のふるまい	
—「考える」「感じる」—	195
3.1. 「考える」を述語とする文にあらわれる形容詞 ...	195
3.2. 「感じる」を述語とする文にあらわれる形容詞 ...	199
4. まとめ	203

第9章 内面的用法における形容詞のタイプ (3)

—動きの様子を表す場合—	205
1. 問題の整理	205
2. 動きの様子を表す場合の形容詞のタイプ	206

2.1. 形容詞連用形が動きの様子を表す場合の述語の特徴 ...	206
2.2. 動きの様子を表す場合の形容詞の特徴 ...	207
3. まとめ.....	209
第10章 その他の問題—「うれしい」と「楽しい」を例に一	211
1. 問題の整理.....	211
2. なぜ「メジロがうれしくさえずっている」は不自然なのか.....	214
3. なぜ「うれしく遊びませんか」は不自然なのか.....	219
4. その他の形容詞と持続性.....	223
5. まとめ.....	224
第11章 連用用法における形容詞のタイプのまとめ	226
1. はじめに.....	226
2. 連用用法に関わる要素 (1) 一形容詞が表す判断の志向性と、要素の必須性—	226
3. 連用用法に関わる要素 (2) 一形容詞が表す判断の基準—.....	231
4. 連用用法に関わる要素のまとめ—形容詞と動詞とのインターアクション—	233

第3部 残された課題

第12章 残された課題 (1) 属性叙述における構文の選択	
—「Xさんはピアノを上手に弾きます」をめぐる—.....	238
1. 問題の整理.....	238
2. 「上手さ」を表す文とは.....	239
3. A型で述べる「上手さ」とは.....	243
4. V型で述べる「上手さ」とは.....	245

5. アンケート調査に見る A 型・V 型の選択と事柄の具体性	246
6. まとめ	247
第 13 章 残された課題 (2) 言語間における構文の選択の差異	
—「(髪を) よく切ったね」をめぐる—	249
1. 問題の整理	249
2. 考察の対象	251
3. 「よく」と「jal」が共起する動詞の違い	253
4. 日本語・韓国語の「出来ばえの述べ方」における違い	256
5. おわりに	258
終章 まとめと今後の課題	259
1. 本書における 2 つの視点	259
2. 形容詞の連用用法の分類	259
3. 連用用法の成り立ちやすさに関わる形容詞のタイプ	260
4. 先行研究における形容詞の分類と本書における形容詞のタイプ分けの 対応	267
4.1. 形容詞の表す判断と「主体」「対象」という 2 つの要素の関わりという観 点と先行研究との対応 ...	267
4.2. 判断の基準・視座のあり方という観点と先行研究との対応 ...	268
4.3. その他の観点 ...	270
5. まとめと今後の課題	270
付 録	273
参考文献	287
索引	292
あとがき	296

序章

本書の目的と構成

1. 本書の問題意識

「今日は暑いなあ」「これ、おいしいね」というように、形容詞を用いて自身の心情や人や事物の状態を表すことはごく日常的な言語活動である。それは、日本語に限ったことではなく、ほとんどの言語においても同様であろう。また、その形容詞を述語としてだけでなく、「静かに食べる」「美しく咲く」のように副次的成分として用いることもごく日常的に行われる。日本語でその副次的成分は連用形という活用形（屈折）によって表されるが、英語では「silently」「beautifully」の「ly」のように接尾辞を付加するといった派生によって表されることもある。また、韓国語では日本語の形容動詞にあたる語については「 조용히」（静かに）の「히」のような副詞化接尾辞で、日本語の形容詞にあたる語については「예쁘게」（美しく）の「게」のような副詞形語尾で表す。

本書は、この形容詞の連用形の文中におけるふるまいを連用用法と呼び、現代日本語における形容詞の連用用法を考察の対象とするものである¹。上で簡単に述べたように、形容詞という品詞があること、形容詞が形態を変えて副次的成分としてふるまうことはほかの言語でもあり得ることであり、それ自体の理解にはそれほど労力は要しないだろう。それにもかかわらず、外国語の学習において、目標言語のそれを正しく使えるようになることは容易であるとは言えない。そのことは次のような日本語学習者による作文の例が示している。

¹ 後述のように、本書の対象は、副次的成分に限ったものではない。

第1部

先行研究における形容詞と連用用法

第1部では、本書の考察対象である形容詞、及び、その連用用法が先行研究の中でどのように論じられてきたかを整理する。第1章では、動詞、名詞との違いから形容詞の位置づけを考える。さらに、終止用法、連体用法、連用用法の3用法がどのように扱われてきたかを整理する。第2章ではこれまでの形容詞研究の成果を概観する。従来の分類は終止用法における形容詞のふるまいを中心としたものであった。本書では連用用法における形容詞のふるまいを考察する立場から、形容詞の分類の観点を再考する必要性を提案する。連用用法における形容詞のふるまいを見る上で重要なものの1つが形容詞の取る格である。第3章では、形容詞の取る格から見えるものを探る。第4章では、文の成分としての形容詞連用形がこれまでの研究でどのように位置づけられてきたのかを考える。その上で、形容詞の連用形のふるまいを捉える上で必要な連用用法の分類のあり方を示す。

第2部

連用用法における形容詞のタイプ

第1部では従来の研究において、形容詞がどのように捉えられてきたかを概観した。第2部では、形容詞の連用用法を具体的に考察していく。第4章で示した通り、「～ガ～ヲ（形容詞連用形）～スル」という外形を取る文を対象とする。第2部では、どのような場合に連用用法が成り立つのか（あるいは成り立たないのか）を記述し、それには形容詞のタイプが大きく関わることを示す。ここでは、形容詞のタイプを6つのテストを用いて定義づける。このテストは、属性叙述文、感情表出文が成り立つかといった文の類型を問うもの（テスト①③）や、感情表出文において対象格を必須とするか（テスト②）、あるいは、属性叙述文において照合基準格を必須とするか（テスト④）、適合基準格を取り得るか（テスト⑤）、第三者を経験者格に取り得るか（テスト⑥）といった格構造を問うものである。このように、第2部では文の類型や格構造から形容詞のタイプを抽出するという手法を取る。その上で、それらの要素がなぜ連用用法の成り立ちやすさに関わるのかを明らかにすることを目的とする。

例文凡例

第2部の例文における「*」は、非文であるという場合と、「外面的用法」あるいは「内面的用法」のいずれかの解釈が説明されている場合に、そう解釈できない場合の両方を含んでいる。文法的ではあるが、本文で言及している解釈が成り立たない場合には#を付すのが一般的ではあるが、内面的用法と外面的用法の違いを問題にしている本章においては、混乱を避けるため、外面的用法について論じている場合には「外面的用法」として解釈できないものについては、内面的用法としての解釈が可能であっても、「*」を付し、反対に内面的用法について論じている場合には「内面的用法」として解釈できないものについては、外面的用法としての解釈が可能であっても、「*」を付す。なお、「内面的／外面的」の解釈とは別に、本文中で言及している解釈と異なる場合には「#」を付している。

第3部

残された課題

第2部では形容詞のタイプが連用用法の成り立ちやすさに関わることを明らかにした。第3部では、連用用法の成り立ちやすさに関わるその他の要因をほかの用法との対立を通して考える。第1章で見た通り、形容詞には終止用法、連体用法、連用用法の3つがある。同じ事態を終止用法によって述べることも、連用用法で述べることもできる場合に、どのような場合に連用用法を選択するのだろうか。第3部では2つのケーススタディを通して日本語における連用用法の選択の特徴を考える。第12章では属性叙述における終止用法及び連用用法の選択条件を明らかにする。次に、そのような用法間の選択は言語によって異なる場合があるとの予想をもとに、第13章では韓国語との対照を通して日本語における構文の選択の特徴を考える。